

世界文化遺産アルフェルトの ファーグス工場

お茶の水女子大学名誉教授 田中 辰明

はじめに

ドイツのハノーバーの南50km程の所にアルフェルト(Alfeld)という町がある。ここにはヴァルター・グロピウス(Walter Gropius 1883~1969)が1911年に設計、建設したファーグスの靴型工場がある。グロピウスは1883年5月18日にベルリンで生まれ、1903~1907年の間ミュンヘンとベルリンの工科大学で建築を学んだ。卒業後AEGタービン工場(写真1)などを設計したペーター・ペーレンスの設計事務所に入り(1908~1910)、ここでミース・ファン・デル・ローエと出会っている。ドイツヴェルクブンドにも参加した。1911年にファーグスの靴型工場を設計しているが、これは後になって設計するバウハウスのデッサオ校の校舎(写真2)を思わせる鉄とガラスを用いた初期モダニズム建築であった。バウハウスの創立について説明すると、1915年にヴァイマル大公によりベルギーの建築家ヴァン・デ・ヴェルデが招かれ、1902年にヴェルデ私設の「工芸ゼミナール」を設立している。1908年「大公立美術工芸学校」に発展した。しかしヴァン・デ・ヴェルデはドイツヴェルクブンド展でヘルマン・ムテジウス(ドイツヴェルクブンド創立者)と衝突し、1915年にドイツを去らざ



写真1 AEGタービン工場、ペーターペーレンス設計1911~1912



写真2 バウハウス・デッサオ校舎、グロピウス設計



写真3 ガラスの家、ブルーノ・タウト1914

るを得なくなった。そして後任を建築家ヴァルター・グロピウスに託した。グロピウスは1919年に統合された国立バウハウスがヴァイマルに開校すると初代校長になっている。従ってファーグスの靴型工場はグロピウスがバウハウス校長になるよりも8年前、28歳の時の作品である。ファーグス工場の実績が認められバウハウスの初代校長に抜擢されたと言って良い。ブルーノ・タウトがやはりケルンで開催されたドイツヴェルクブンドの展覧会にガラスの家(写真3)を発表したのが1914年であるので、ファーグス工場はそれよりも3年早い事になる。



写真4 ファーグス靴型工場前景



写真5 ファーグス靴型工場

1. ファーグスの靴型工場

ファーグスとはラテン語で樹木の「ぶな」を意味する。この工場の創業者はカール・ベンシャイド(Carl Benscheidt:1858~1947)氏で当初はアルフェルトの中を流れるライネ川(Leine)の右岸にある工場に従業員として働いていたが、経営者と意見対立があり、辞職して自ら左岸に工場を設立し、ぶなで靴型を製造したそうである。グロピウスの才能を見抜き設計を任せたとのことだ。当時やっとドイツに大型工場が作られるようになったが、多くは大型の教会をモデルにし、その中に製造機械を設置したそうである。従って工場内はうす暗く、労働環境は決して良いものではなかった。グロピウスは自然採光を工場内に取り入れるために「鉄とガラス」の建築を提案、これを経営者ベンシャイトが取り入れた。睡眠をとる時間以外は靴を履いて生活するドイツ人にとって、靴が如何に自分の足にフィットするかは極めて重要な問題である。

ベンシャイドはアルフェルトに存在するぶなで靴型を作り、靴職人がこれに皮革を当てて靴を製造したそうである。人の足であるので、いろいろの形があったが、どのような靴型もそろえるというのがこの工場の自慢であった。この工場は2011年6月25日にユネスコの世界文化遺産に登録されている。筆者は2013年12月2日にこの工場を見学した。日本から予め見学案内を依頼しておいたカール・シューネマン(Karl Schünemann)さんが案内をして下さった。同氏は創業者生存中からこの会社に勤務し、現在は4代目の社長で同族経営であるとの事であった。本来ドイツは12月ともなると暗く厚い雲が垂れこみ、一体いつになったらこの雲が退いてく



写真6 ユネスコ世界文化遺産登録証

れるのかと陰鬱な気候の日が続くものである。それが筆者の訪問日は全く嘘のような快晴日であった。案内のシューネマン氏も「貴方がこんな良い天気を持ってきてくださった！嬉しい！」と喜んでくださった。ハノーバー通りに面して工場の入り口がある。蒸気ボイラ用の煙突と工場の組み合わせが素晴らしい(写真4)。右側の建物が建築史の教科書で良くお目にかかるファーグス工場である。これを大きく写したものが写真5である。工場の上には創業者のカール・ベンシャイドの名前が付いていた。工場に入るとこの工場がユネスコの世界文化遺産に登録されたという証明書が掲示してあった(写真6)。シューネマン氏は「この工場が文化遺産に登録されたことは会社にとっても、従業員にとっても、アルフェルトの町にとっても誇りです」と喜びを露わにした。この工場の裏側は敷地に接してドイツ鉄道の列車が走っている。工場は従来鉄道の線路からは距離を置いて建設するのが常識であった当時、創業者ベンシャイド氏と設計者



写真7 ファーグス靴型工場の裏側(ドイツ鉄道の線路に面する)



写真8 線路側の工場内部(当時の建築としては広い面積のガラスが使用された)



写真9 工場の入り口

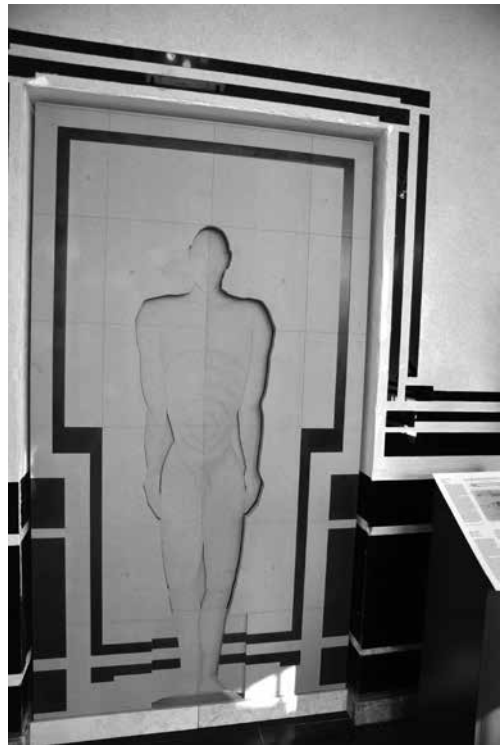


写真10 グロピウスの人体モジュール

グロピウスが無名であった工場の名前を広く知らせしめる為に敢えて線路際の敷地を工場用地として選定したとの事であった。当時としては画期的な事であったそうである(写真7)。写真8に工場内部から見た隣接するドイツ鉄道の線路を示す。このようにガラス面積を非常に大きくとった事は当時としては斬新な事であった。写真9に工場の入り口の写真を示す。ベルリンでパーレンスが設計したAEGタービン工場を髣髴させるものがある。グロピウスは工場設計に当たり、常に人体寸法を重視し、工具が作業に使用する工具を持った場合の空間の取り方

などに配慮したとの事である。グロピウスが考えた人体寸法からくるモジュールを写真10に示す。このようなモジュールが玄関から入った場所にあるという事は作業を能率よく、事故の無いように行う事にグロピウスが配慮したという証であろう。写真11、写真12に工場内の階段を示す。一般の工場にある単調な階段ではなく、手すりのデザインも素晴らしい。下の方の段では踏面の幅を広げている。ブルーノ・タウトが日本に唯一残した熱海市の旧日向別邸の舞踏室(もしくは卓球室)へ降りる階段と同様の手法である。



写真11 ファーグス靴型工場階段

写真11では後方に大きなガラス窓が見える。さすがにこれだけ大きいガラス窓であるとコールドドラフトも大きくなり、大きめな放熱器が窓下に設けられている。グロピウスは当時の建築家と同様に建築に合わせた椅子や家具の設計も行っている。写真13にグロピウス設計の机と椅子を示す。これは工場内に配置され、工具どうしの打ち合わせなどに使用されたものである。写真14に自然採光を十分に取り入れた工場内の作業台を示す。ここでぶなの木を材料にして各種の靴型が製造された。写真15にグロピウスが創業者ベンシャイドの執務用に設計した机と椅子を示す。ここではミース・ファン・デル・ローエが設計したスティールを用いた椅子も工場内で使用された。これを写真16に示す。写真17にグロピウスが1922年に設計した椅子、写真18に1920年に設計した椅子、写真19に1923年に設計した椅子を示す。これは工場内で使用されたものではなく創業者ベンシャイド家の為に設計され、客室で使用されたものである。工場にはグロピウスのファーグス工場のスケッチも残っている



写真12 工場内階段



写真13 グロピウス設計の椅子と机



写真14 自然採光を十分に取り入れた作業台

(写真20)。また創業者カール・ベンシャイドとグロピウスの交友関係は長く続き、工場内には両氏の往復書簡が沢山保存されていた。グロピウスはナチス政権により弾圧を受け、米国シカゴへ亡命し、そこで多くのガラスの高層建築を建設する事になるが、米国への亡命後の往復書簡も残っていた。ここではその一つシカゴで仕事していたグロピウスが第二次大戦後故郷ベルリンに「グロピウスシュタット」と呼ばれる大団地の設計依頼を受け



写真15 創業者ベンシャイドの執務用にグロピウスが設計した椅子



写真16 ミース・ファン・デル・ローエが設計したスティール使用の椅子



写真17 グロピウス設計の椅子(1922)



写真18 グロピウス設計の椅子(1920)



写真19 グロピウスがベンシャイド家の為に設計した椅子(1923)

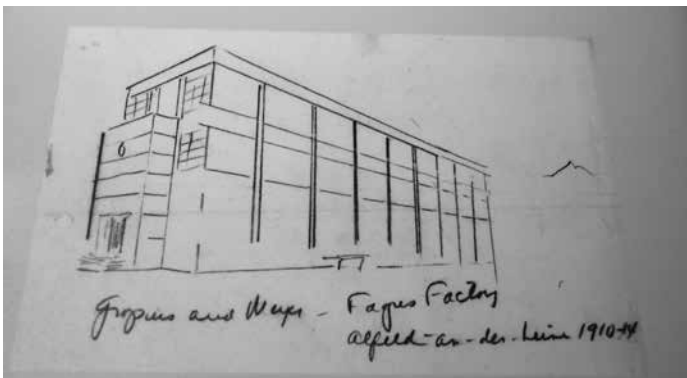


写真20 グロピウスの工場スケッチ



写真 21 グロピウスがベンシャイドに宛てた手紙



写真 22 創業時の靴型製機械



写真 23 ファーグス・グロピウス・カフェ



写真 24 Fagus/GreCon 社

たことに対するお祝い状や家族間の交流を示す郵便も含まれていた。ここではグロピウスがシカゴからベンシャイドに対し、「雑誌に発表するので、ファーグス工場の写真を提供して欲しい」として1966年1月18日付の手紙を示す。恐らくグロピウスの秘書がタイプを打ちやすいように英文で書かれている。これに対し、ベンシャイド氏からグロピウスに宛てた手紙はドイツ語である。この手紙の中でもグロピウスはベンシャイド家への気遣いを示している(写真21)。工場の一部には創業時に稼働していた木製靴型の製造機械も展示されていた(写真22)。現在は靴型はぶな材で作られる事はなく、加工がさらに行いやすい合成樹脂に代わっている。靴型の需要も減少してきており、工場にも余裕のスペースが生じた。そこを社員食堂として使用し、これに工場設計者のグロピウスの名前を冠し、ファーグス・グロピウス・カフェ(Fagus/Gropius/Kafe)と称している。その入り口を写真23に示す。手すりの末端まで凝ったデザインが

施されている事がわかる。工場としては靴型製造の需要が減少していく傾向には対策を取った。非常に多種多様な靴型を製造していくうちに微妙な測定などを可能とする精密機械製造技術が発達し、その部門を成長させている。この部門をGre Conと呼んでいる(写真24)。

丁寧案内をして下さったシューネマンさんが別れ際にお土産にと下さった木製の靴型に氏が敬愛する初代経営者の言葉が刻印されていた。「私共の財産は製造機械でもありません、ましてや銀行口座でもありません。財産は私と一緒に働いてくださる従業員皆様の知識と協力です」(写真25)とある。

ファーグス工場の建つアルフェルトの町の歴史は古く、1214年にこの地名が歴史に出てくるそうである。町中を流れるライネ川を中心に発展し、多くの水車が存在したとの事である。1610年にはラテン語学校が建設され、教育にも熱心であった。この建物は現存し、街の博物館となっている(写真26)。



写真 25 筆者がお土産に頂いた木製靴型



写真 26 1610年にアルフェルトの町に建てられたラテン語学校(現在は博物館)



写真 27 アルフェルトの町の木組住宅



写真 28 アルフェルトの市庁舎

街の中には木組の住宅も多く(写真27)、市庁舎も歴史を感じさせる建物である(写真28)。商店街は迫りくるクリスマスを前にクリスマス商戦が活発であった(写真29)。

註：この内容は2014年1月19日(日)午後6時よりTBSテレビ「THE世界遺産」で筆者の監修により放映された。

〈参考文献〉

1. 田中辰明・柚本玲「建築家ブルーノ・タウト—人とその時代、建築、工芸 オーム社
2. 田中辰明「「ブルーノ・タウト」・日本美を再発見した建築家、中公新書2159
3. 田中辰明「ブルーノ・タウト・建築・芸術・社会」東海大学出版会



写真 29 アルフェルトの商店街